第二章

長享本の考察

はじめに

京都大学付属図書館蔵長享年間書写『沙石集』（以下、長享本）は、流布本系統の中で最も書写年代の古い写本である。長享本そのものについての研究は、現在までほとんど見受けられず[*1]、渡辺綱也による日本古典文学大系の解説が、最も詳細なものである。渡辺の解説を参考としつつ、長享本の概要を述べた後に、主に刊本との比較を通して長享本の特色を考えていきたいと思う。

第一節　長享本の伝来

長享本は巻七を欠巻とする九巻九冊本である。巻三・巻四を除く全巻に快秀なる僧の識語があるので、次に抜粋する。

〈巻一〉

於高野山金剛峰寺五室菩提院上間学窓写畢。是努名聞利養意楽アラズ。余愚盲短才而一分之無覚解候間、自然分之出迷之便伺、筆墨染畢。長享三歴（ママ）己酉八月中澣七日　沙門快秀勢州

〈巻二〉

於高野山五室菩提院上間学窓書写畢。併自他出迷本誓也。名利思不可有者也。長享三年乙酉八月十五日　快秀

〈巻五〉

長享三年八月上澣七日書畢。　快秀　於高野山五室菩提院上間学窓写畢。

〈巻六〉

長享三年乙酉七月廿九日書畢。　快秀　於高野山五室菩提院上間学窓写之畢。

〈巻八〉

長享三年七月廿三日書畢。　快秀

〈巻九〉

於高野山五室菩提院書写畢。是偏化他転迷開悟之意趣也。後見人々可預御廻向也。長享三年乙酉七月中澣八日　快秀

〈巻十〉

写本云、明徳二年十二月十日於石住寺書写之　康実云々

雖為悪筆、彼ノ無住之心、此ノ有執之身ニ露斗リアラマホシク覚ヘ侍ルマヽ、写置之畢。愚僧之意願、此ノ本作者之心中ニ相ヒ同ジ。忝ク上智ノ古徳ニ下愚ノ今身ノ廻向之心等シト云ル雖モ有ト恐ニ、三密平等之義、諸仏猶ヲ衆生ニ同也。況ヤ人倫ヲヤ。一心不生ナレバ、何ゾ古今ノ隔テ有ン。三世之分別ハ、夢中ノ権現也。実ニハ一念ニ久遠劫在之ニ乎。

於高野山五室菩提上間学窓書写畢。長享三歴（ママ）乙酉七月中旬　快秀

巻十の識語から、明徳二（一三九一）年、康実という僧が石住寺で書写した本を、長享三（一四八九）年に、快秀が書写した本であることがわかる。快秀については、伊勢国の僧であり、高野山五室谷にあった菩提院にて長享本を書写したこと以外、詳らかにしない。康実についても同様であり、石住寺が何処にあった寺かもわからない。しかし、明徳二年と言えば、無住の『沙石集』執筆（弘安六年）後、百八年後に長享本の親本は書写されたことになり、現存する流布本系統の諸本の中で、最も書写年代の古いものとなる。長享本そのものの書写については、識語によると、

巻一　八月中澣七日→八月十七日

巻二　八月十五日

巻五　八月上澣七日→八月七日

巻六　七月二十九日

巻八　七月二十三日
巻九　七月中澣八日→七月十八日
巻十　七月中旬→七月十日〜

という手順で行われたことになり、なぜ巻の最後から逆順で書写したのかは不明である。渡辺は長享本について、次のような評価を下している[*2]。

現存の略本系諸本中、最古の書であり、徳治三年（一三〇八、十月九日延慶と改元）五月の加筆以前の形を伝える書ではないかと考えられる。流布の刊本に比して、全巻に甚だしい本文上の相違があり、特に巻第九において著しいのは、沙石集成立過程を考える上に、重大な意義をもつものと思う。

私見においても、この渡辺の見解は適当であると考えるが、その後、より詳しい考察が何もなされてこなかったことから、長享本の特質が諸本論に生かされることはついぞなかったのである。次節からは渡辺の指摘に沿う形で、徳治三年の改訂以前の本文を有することを再確認した上で、他本との比較において重要な差異を取り出し、長享本の性格を明らかにしていきたい。

*1　頴原退蔵「『沙石集』の長享古写本について」（大谷学報　昭和四年六月）。藤井勇夫『校註沙石集』（平楽寺書店　昭和八年七月）は貞享三年版本を底本とするが、頭注に長享本との校異を載せる。

*2　岩波日本古典文学大系『沙石集』解説（28頁）。